

令和7年度 青梅市立第四小学校 学校評価シート

＜学校経営方針の重点＞ 1. 確かな学力の定着 2. 豊かな人間性と社会性の育成 3. 特別支援教育の充実 4. 特色ある教育活動

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄	
						評価	コメント
確かな学力の定着	基礎学力の定着と、問題解決型の学習を推進する。	ユニバーサルデザイン「学びたい授業」の実践	<p>聞く、話す、考える基本を重視した真摯な学習態度を育成する。学力向上へ向けて、児童の学習意欲を高め、「力が付く授業」「学びたい授業」づくりを行い、基本的な学習内容の習得を徹底する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「学習することがとても好き」「好き」と回答している児童が約85%であり、「とても好き」と回答している児童の割合が4%増加しており、学習への意欲が高まっていることが分かる。 全校で研究に取り組んだ国語科の読み取りも、児童のA・B評価が85%と高く、読み取りに自信をもつことができている。 昨年度の課題であった自分の考えを表現することについて、A・B評価が増加しており、改善傾向である。 「力が付く学習指導の実施」に関する保護者調査について、A評価の割合が昨年度よりも5%増加しており、教員の努力を理解してもらっている。 「子供の授業内容の理解」に関して、A評価が4%低下しており、教員の努力に対して結果が付いていないという、ねじれ現象が生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の意欲や理解につながっている、国語科の研究を通して獲得した指導の工夫を、他教科の指導にも応用し、児童の理解を深め、興味関心をより広げていけるようにする。 教員の相互授業参観を通して、指導力をさらに向上させる。 基礎的、基本的な内容理解の習熟に力を入れていく。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 教員同士で授業を合同で実施したり、交流をしたりしていることが良い。学級ごとではなく、学年全体で取り組む姿勢が見られる。 全国学力テストの向上（特に国語科）が見られるので、成果認められる。 指導の結果子供たちに話し合いスキルが向上している。 国語の力は、将来必要なものであるため、その力が伸びていることが期待できる。 読書習慣については、今後の課題である。障害を通して学び続けるためにも、本を読む習慣を身に付けさせて欲しい。
			<p>一人一台端末や電子黒板、ICT機器を有効活用する。さらにデジタルとアナログの双方の良さを取り入れながら、学習指導を充実させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「教育活動におけるICT機器の活用」に関する保護者への調査で、A・Bと回答した割合が今年度も85%を超えており、一定の評価を得ている。 一方で、A評価の割合は下がっており（5%以上）、現状の活用状況に新鮮味をもたれていない状況が伺える。 指導者のICTスキルによって、指導内容に差があることを指摘する意見が保護者から寄せられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「個別最適な学習」「共同的な学習」の実現に向けた、より効果的なICT機器の活用について、ICT推進委員会を中心に、学年に応じた指導内容を検討し、校内で共有する。 効果的なICT活用をしている教員の授業参観を行うなどして、教員全体のICT活用能力と指導力を向上させる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ICTを活用する環境を整えることができています。 ICTを個人学習に活用することができているので、次の段階として表現に活用するスキルを身に付けさせて欲しい。 デジタルとアナログのバランスを、うまくとっている。手で書くこと（ノート指導）も大切に続けて欲しい。
			<p>学年に応じた家庭学習の内容を示し、「学年×10分の家庭学習」の習慣化を図る。また、家庭の協力を得て年2回の「メディアコントロールチャレンジ」を実施し、規則正しい生活習慣を定着させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 保護者を対象にした家庭学習に関するアンケートで、A・Bと回答した割合が60%程度であり、昨年度から約5%低下してしまっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習の重要性について、児童保護者双方に向けた啓発を継続する。 校内研究やOJTを通して、家庭学習の内容や時間、取り組み方について組織的な検討を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 宿題などの家庭学習を学校が課すことの難しさを、近年感じる状況ではあるが、粘り強く働き掛けてもらいたい。まずは、学習する机に向かって座ることから取り組ませてほしい。 第四小学校では、日記の取組を通して児童のコミュニケーション能力や表現力を高めた教員がいる。参考にしてはどうか。
豊かな人間性と社会性の育成	基本的な生活習慣の確立と規律ある生活を実現する。	気持ちよく生活する態度を育成	<p>「すてきな四小の子供（学校生活の約束）」を指導しながら、健全な生活習慣を定着させる。「全力あいさつ」「全力そうじ」「全力感謝」を、教職員が手本となりながら、全校で指導していく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 児童対象の調査において、「あいさつ」「そうじ」「友達と仲良くすること」に関する項目全てにおいて評価が高く、「あいさつ」「そうじ」は昨年度よりも向上している。 保護者は、子供の「基本的な生活習慣の習得ときまりの順守」について昨年度よりも非常に厳しい見方をしており、学校内と家庭での乖離が生じていることが伺える。「生活習慣の指導」についても、A・B評価がやや減少している。 	<ul style="list-style-type: none"> 子供たちが感じている手ごたえを価値付け、自信をもって学校外の場でも良い行動をとれるようにしていく。 学校だけでなく、保護者・地域と連携を深め、大人が進んでよい行動を示し、よりよい生活習慣を習得できるよう一致した指導ができるようにする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 現在、児童のあいさつなどを見ると、第四小学校の雰囲気が良いことが強く感じられる。 児童だけではなく、保護者の様子も良く、対応していて気持ちが良い。 さらに上の状況を目指して欲しいと願っている。
			<p>児童一人一人の良さを大切にす学年・学年経営を行うために、個々のよさの発見に努め、それを学習指導や生活指導に生かす。いじめ、不登校の未然防止と早期解決に取り組む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「学校は楽しいですか」という質問に対して、A・B評価をしている児童の割合が90%を超えており、学校にいる心地よさを感じている子供が多いことが分かる。 一方で、保護者への「評価は毎日楽しく学校に通っている」かという調査のA・B評価は、若干昨年度より割合を下げている。 「児童一人一人の特性に応じた指導・支援」に関する調査については、昨年度よりも微増しており、学校の取組が認められている様子が伺える。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度教職員で心掛けた、児童の成長を実感させる評価や言葉かけを継続することや、巡回心理士やスクールカウンセラーと連携した児童把握と適切な支援を、今後も継続していく。 保護者面談を、年間1回から2回に増やすのと同時に、適宜保護者と児童の様子について意見を交わし、学校と家庭が一体になって子供の教育に当たることを心掛ける。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 不登校、不登校傾向の人数は増えているが、状況を把握し、様々な対応の形を柔軟に取っていることが良い。 不登校の理由は、以前はいじめであったが、現在は複数の理由が挙げられる。決めつけるのではなく、多方面からアプローチを掛けて欲しい。 外部機関との連携が、以前よりも進んでいる。 児童が、「学校が楽しい」ということを、上手に表現で表現できていないことが予想される。
			<p>異年齢集団（たてわり）の活動を通して、男女仲良く協力し助け合うことで相互理解しながら、自己有用感を高め、児童の自主性や責任感・思いやりを養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「友達と仲良くしていますか」という調査に対して、A・B回答をしている割合が、今年度も95%超であり、またAの割合が昨年度よりも4%上昇しており、児童間がより仲良くなっていることが伺える。 主に縦割り班活動で取り組んでいる掃除について「一生懸命取り組んでいますか」という調査に対してA・B回答をしている割合が97%を超えており、縦割り活動の成果を表している。 	<ul style="list-style-type: none"> 縦割り活動の効果が確実に期待できるので、より多くの場で活動の機会を増やせるよう計画を立てる。 今年度学習の場でも、兄弟学年での合同活動を実施してきたので、その振り返りを行いながら、効果のあった取組を継続していく。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 第四小学校は、縦割りの文化が根付いており、上級生から学んでいる様子が見られることがとても良い。縦割りの成果は明らかであるので、縦割りを活用する場面をさらに増やして欲しい。 高学年が活躍する場面が確立しているので、次は中学年の役割ができてくるとよい。

特別支援教育の充実	児童の個性を理解し合い自己実現を図る。	把握し、一人一人の教育的ニーズを把握し、必要な支援を実施	<p>つくし学級及び特別支援教室ひまわりと通常学級の児童間・教師間の交流や連携を通して、仲間意識や障害を含む他者理解を深め、偏見をなくし、温かい人間関係を育てる。</p>	<p>・「交流学習を通じた理解教育の充実」に関する保護者への調査において、昨年度よりもA・B評価の合計が4%上昇した。しかし、まだ80%を超えてはおらず、この分野ではより一層の改善が必要であることが伺える。 ・通常学級担任と、特別支援学級担任の協議会数を昨年度よりも増やしており、教育活動の中で同じ活動に取り組む機会は昨年度よりも増えている。</p>	<p>・第四小学校における特別支援教育について、保護者地域により一層周知を図る。学校ホームページや学校便りなどで、活動の様子や、交流の意義について知らせる。 ・今年度新しく取り組んだ交流の教育活動について年度末に振り返りを行い、良いものを継続し、課題があったものの見直しを行う。そうすることで、子供たちが意義を実感できる活動を増やしていく。</p>	A	<p>・同じ学校の中に特別支援学級があることを、第四小学校は交流を通して有効に活用することができている。同じ場所で学んだり生活を送ったりすることで、子供たちは他の学校ではできない学びをすることができおり、そのことは将来大きな財産になる。 ・上記のことを、学校は自信をもって外部に発信していつもらいたい。また、子供たちにもわかるように教えてあげて欲しい。</p>
			<p>校内委員会、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラーや外部機関と積極的に連携し、児童の特性に応じた指導や支援ができるようにする。</p>	<p>・児童の状況を確認と、その情報を共有するための校内委員会の回数を昨年度よりも増やし、校内体制で児童の個性と特性の理解に努めた。 ・「児童一人一人の特性に応じた指導・支援」についての保護者調査で、A・B評価が1.5%増加したが、まだ80%を超えていない。また、「分からない」という回答の割合が増加してしまっており、学校からの周知などが十分ではない状況が伺える。</p>	<p>・第四小学校の校内支援の体制について、年度初めに保護者に周知する。 ・校内委員会を中心とした全校体制を、引き続き継続する。 ・教育相談室や登校支援室など、外部組織との連携をより強固にする。</p>	A	<p>・第四小学校の取組が、きちんと伝わっていないように思われる。学校が、「校内委員会だより」のようなものを発行し、保護者や地域に発信していつらはどうか。 ・今年度、河辺小学校にある「きこえとことばの教室」との連携が進んでいることが分かる。 ・外部機関に加えて、地域との連携や、地域から学ぶ機会をさらに増やしていつもらいたい。</p>
			<p>「朝学習」や「放課後算数教室」を充実させ、基礎学力の習熟を図る。年3階の読書週間を設定し、図書ボランティアや青梅市派遣の司書と連携しながら、読書指導の充実を図る。</p>	<p>・放課後算数教室指導者を保護者から募集し、継続して実施したことで、教室参加児童の知識・理解を確かめるペーパーテストで得点の向上が見られた。 ・子供への調査では、「本を読むことが好きか」という内容において、A・B評価の合計が昨年度よりも微増したが、A評価の割合に関しては低下しており、読書への意識づけが十分ではなかったことが伺えた。</p>	<p>・図書ボランティアや司書にも意見を聞きながら、読書推進活動の内容を見直し、子供の読書習慣定着につながる取組を実施する。 ・放課後算数教室指導者の募集を継続し、より充実させる。</p>	B	<p>・地域に声を掛けて行ってもらいたい。放課後算数教室の指導者など、ボランティアをしてくれる人材が、まだいると考えられる。第八支会の回覧板を活用してもらいたい。 ・読書への意欲をまずもたせるために、学習に役立つマンガを活用することを検討して欲しい。</p>
特色ある教育活動	保護者・地域等と連携し、教育環境を充実・整備する。	児童の実態、教師の強み、保護者・地域の教育力、青梅の自然環境を生かしたカリキュラムマネジメント	<p>地域人材の活用や地域の自然・文化・施設に働きかけ、青梅学を推進する。関係機関と連携し、安全な環境を整え、安全教育の充実を図る。</p>	<p>・昨年度見直した教育活動を、今年度実施しながら、さらに地域を題材にした学習活動を増やすことができた。経営主幹、教務部を中心に、継続できるよう系統化することにも取り組んでいる。 ・「PTAや地域との連携」に関する調査では、昨年度よりもA・B評価の割合を増やしており、学校の取組が保護者にも伝わっていることが伺える。一方で「声の受け止め」に関しては逆に低下しており、改善する必要がある。</p>	<p>・学校運営協議会委員に協力していただきながら、さらに地域を題材にした教育活動の実践を増やしていく。 ・地域を題材にした教育活動を通して、児童の学習意欲や、実践的知識技能を生かせる機会を増やすことで、学力の向上もねらう。 ・保護者地域に実践を伝え、理解を図る。 ・地域・保護者からの声を校内で共有しながら、教育活動に生かしていく。反映が難しいものに関しては、管理職から説明し、理解を求めるようにする。</p>	A	<p>・第四小学校の地域連携は、他と比較してもとても良いと言える。 ・校長が積極的に、「四小に遊びに来てください」と、様々な場所で呼び掛けていることが成果になっている。 ・PTAと地域のつながりについて意見が寄せられているが、学校運営協議会ができたことで、学校と地域をつなぐ役割について変化が起きていることが伝わっていないことが原因であると考えられる。市と連携して、伝えていく必要がある。 ・個人情報保護する筆意要請が高まったことで、地域の集まり(子供会など)に誘いづらくなっている。</p>
			<p>学校公開および学校評価の実施、学校便りなどの各種便り、ホームページやメール配信等、学校情報のきめ細かい発信を行い、保護者や地域との連携を深める。</p>	<p>・ほぼ毎日のように学校ホームページを更新し、定期的に教育活動を伝えることに努めることができた。 ・教育活動の発信に関する調査のA・B評価の合計が昨年度よりも低下しており、保護者が新鮮味を感じていない状況が分かった。</p>	<p>・今後も、学校便りや学年便り、学校ホームページを通じた教育活動の発信を継続する。 ・今年度の保護者調査において、「分からない」と回答している割合が高い内容を重点的に伝えるようにする。</p>	A	<p>・学校便りと学年便りを一つにまとめたことは、分かりやすく良い。 ・お便りの内容に、「温かみ」が欲しい。 ・移動教室中の情報発信は、来年度から行った方がいい。保護者の皆さんは、出かけている最中の子供のことを心配しているので、簡単なものでよいので、発信していく。</p>